

日本はまだコロナを侮っている、欧州では完全に戦争

7

15

2020年4月12日 8時0分

JBpress



4月9日、ロンドンのピカデリー・サーカスの巨大スクリーンに、エリザベス女王と、女王がテレビ演説で述べた国民保健サービスの最前線に立つスタッフらへの感謝の言葉が映し出された（写真：AP/アフロ）

ついに日本でも緊急事態宣言が発令され、**新型コロナウイルス**への対応策が強化されつつある。しかし、元国連職員の谷本真由美氏によると、日本人の捉え方はまだまだ甘すぎるという。イギリス在住の谷本氏だからこそ知っている、“日本には伝わってこない”欧州コロナ事情の最前線とは？

[\[JBpressの今日の記事（トップページ）へ\]](#)

欧州とはまったく異なる日本の“空気感”

このところ日本のニュースを独占するのは新型コロナウイルスの話題ばかりです。

もちろん私が現在住んでいるイギリス、欧州でも大変悲惨な状況が続いております。日本のワイドショーやネットニュースなどで多少なりとも状況は伝えられているので、ご存知の方も多いことでしょう。

しかし、現在イギリスにいる私からみると、欧州が陥っている“本当の事態”というのが、日本ではそこまでよく伝わっていないのではないかと感じています。欧州と日本では、新型コロナウイルスに対する捉え方に違いがありすぎるのです。

その決定的な違いは日本と欧州の“空気感”です。

日本では週末に外出自粛の要請が出ても、お花見に出かけたり買い物に出かけたりしている人が大勢いました。

先日、緊急事態宣言が発令されましたが、それでもいつものように会社に出勤する人はまだ大勢いますし、交通機関もほぼ通常通り動いている。日常生活ではそれほど変わりがありません。

ところがイギリスをはじめ、欧州ではまったく状況が異なります。

欧州では、第三次世界対戦が始まったのとほぼ同じような捉え方をしている人が大半なのです。

私が必要以上に煽っていると思っておられますか？

Twitterで書くような、いつもの冗談だと思われるのでしょうか。

違います。

まったく違うんです。

この状況は各国の経済だけではなく、我々が享受している文明そのものを破壊しかねない、恐ろしく、終わりが見えない“戦争状態”なのです。

相手はどこにいるのかわからず、避けようと思っても忍び寄ってくる……。恐ろしい亡霊のような、しかし破壊力は爆撃以上の恐怖の塊なのです。

欧州の人たちからユーモアが消えた

この事態がどれだけ深刻なことかというのは、イギリス人や欧州大陸の人々のリアクションを見ればはっきりしています。

イギリスだけではなく、欧州というのは、そもそも深刻なことがあってもブラックなユーモアで切り返してやり過ごすような人達が多い国です。

特に私が4年間住んでいたイタリアや、よく遊びに行っていたスペインは非常に楽観的で享樂的な人だらけ。仕事よりも楽しいことを追求する人達なのです。

ところが今回のコロナ騒動では、その彼らからさえユーモアのセンスが一切消えました。

ネットやテレビやラジオに蔓延しているのは悲鳴です。恐怖です。絶望です。

なにせイタリアでは毎日千人近くの人が亡くなっているのです。感染症の数も一向に減りません。テレビに映るのは数多くの遺体。そして急ごしらえの、病院とは決して言えない、“野戦病院”となった展示場や遺体安置所になったスケートリンクなどです。

こうした悲惨な事態を目の当りにして、「映画の中の出来事なのではないか」「私達は本当にこの悲惨な状況をこの目で見ているのか」といったようなことを言う人が大勢います。

なぜそんな風を感じるのか。

それは、たった3週間前までは欧州のどこの国でもごく普通に生活をしていたからです。

春休みが近かったので、みんなの話題といえば「どこに遊びに行くか」「天気が良くなってきたら、庭をどういう風に手入れしようか」「どこのレストランのテラスは気持ちが良い」というような他愛のない話だったのです。

欧州はこの時期に日がうんと長くなって多くの花が咲き始め、楽しい春と夏が始まる——。一年で一番良い季節なのです。日本と違って花粉症もそこまで激しくはありません。欧州の人々はこの季節と夏を楽しみに人生を生きていると言っても過言ではないのです。

しかし現状はそれとは真逆の状況になってしまいました。

「キリスト教的価値観」さえ崩壊した欧州

はじめのうちは、東洋で起こっていたこの“奇妙なウイルス”の話は、欧州の人たちにとってTVモニターの中の話として伝わってきました。

自分たちとは人種も顔も違う人々が、政府の役人や秘密警察に殴りつけられている映像は、あくまで遠い国の話で、自分達の生活に関わることはないことだったのです。

ところが、その映画の中のような事柄が、突然自分たちの生活の中にも入り込んできてしまいました。

事前通告がほとんどない状態で都市が封鎖され、移動ができなくなってしまったのです。学校はもちろん、レストランやパブも閉鎖。街はまるで死んだようになっていました。花が咲き乱れて太陽は燦々と輝いているのに、地中海の海はいつもどおり真っ青なのに、です。

地域によっては、スーパーマーケットの商品が品薄となり、まるで戦時中の配給状態になってしまいました。何時に並べといった指導はもちろん、店に並ぶ際も前の人と2メートル以上の距離をあけなければならない、などと厳しく言われています。入店のために1時間以上並ばなければならないこともざらです。人々は残りすくなくなった商品を取り合って、言い合いになったり、殴り合いになることもあります。

「隣人を愛しなさい」「寛容であれ」「ゆずりあいましょう」——などといったキリスト教的価値観が前提であるはずの欧州は完全に崩壊しました。

自分の命が危険にさらされ、来週になったらもうキャベツやパスタはもちろん、生きていくのに最低限度必要なものが手に入らないかもしれないという恐怖……。

その恐怖で社会が破壊したのです。

海外のニュースを知ることで命を守る

欧州では、店が空けられないので、すでに数多くの従業員が解雇されました。企業はどんどん倒産し、もう再開することのないお店のシャッターは閉まったままです。

我々の愛していたあの穏やかな生活は戻ってくるのか、食料はいつまで手に入るのか、なにより私達は生き延びられるのか——。表面的には多少明るく振る舞っていても、多くの人の心の中を支配するのは、これらの恐怖です。

こうした事態は各国で同時多発的に起こっているのも、もう他の国に逃げることもできません。また、中国に怒りの矛先を向けてもウイルスが消えるわけではありません。

医療物資が不足し、各国の医師や医療関係者のなかにはゴミ袋やシャワーキャップを使って感染者の治療にあたっている方もいます。

世界で最も優れた医療制度を持っていると思い込んでいた欧州の病院でさえ、すでに崩壊しているのです。

この絶望感が支配する欧州の状況を、日本人の大多数はまったく理解していないように思えます。その状況は、まさに3週間前のイギリスであり、フランスなのです。



この記事を読んだ日本のみなさんは、どうか今欧州で起きているこの恐怖を他人ごととして扱わないでください。

欧州だけではなく中国、台湾、香港の状況を学び、自分と家族を守ってください。海外のニュースを知ることは自分だけではなく家族の命をも守ります。

手を徹底的に洗い、他人との接触を避けてできるかぎり引きこもって下さい。飛沫感染にも最大限に気をつけて下さい。

あなたが引きこもるだけで世界を救えるのです。

(初出：WANI BOOKS NewsCrunch)

筆者：谷本 真由美